

乳幼児期の人間関係の発達

小林 真¹

Development of Human Relationship among Infant and Young Children.

Makoto KOBAYASHI

要 旨

本稿では、乳幼児期の人間関係の発達を4つの発達理論を用いて説明する。乳幼児期の人間関係の発達は、①新生児期、②乳児期、③1歳代前半、④1歳代後半、⑤2～3歳代、⑥4歳代、⑦5～6歳代に分けられる。そして、生得的な社会性、愛着の形成、一般的な認知発達、社会的情報処理の発達という4つの発達要素が重層的に重なり合って人間関係が発達していく。そこで誕生から6歳までの発達を4つの発達理論を用いて説明し、乳幼児期の教育を行うための方向性を提唱したい。

キーワード：人間関係、遊び、発達理論

Keywords: human relationship, play behavior, developmental theory

1. 領域「人間関係」のねらいと内容

平成元年版幼稚園教育要領(文部省, 1989)において、領域「人間関係」が設置されてから30年が経過した。この間に教育要領は3回の改訂が行われ、現行の平成29年版幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)では、領域「人間関係」のねらいと内容は次のように示されている。

表1 幼稚園教育要領「人間関係」のねらいと内容

1 ねらい
(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。
2 内容
(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
(2) 自分で考え、自分で行動する。
(3) 自分でできることは自分でする。

- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

また、平成29年版幼保連携型認定こども園教育・保育要領(内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2017)および保育所補保育指針(厚生労働省, 2017)においては、0歳児で保育を行う上での3つの視点が提示された。そして1～2歳児では3歳以上児と同様の領域「人間関係」のねらいが提示された。すなわち、

¹ 富山大学人間発達科学部

3歳未満児に対しては養護を提供し3歳以上児には養護と教育を一体的に提供するという従来の「保育」のあり方が見直され、0歳児から教育的な視点を導入して養護と教育を一体的に提供するという考え方に移行したのである。そこで表2に、保育所保育指針に示された乳児期の保育内容の視点(ねらい及び内容)を示す。

表2 保育所保育指針 乳児期の保育内容の視点

保育所保育指針 第2章1(抜粋)
イ 本項においては、この時期の発達の特徴を踏まえ、乳児保育の「ねらい」及び「内容」については、身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」及び精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」としてまとめ、示している。(中略)
(2) ねらい及び内容
イ 身近な人と気持ちが通じ合う
受容的・応答的な関わりの下で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。
(ア) ねらい
①安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる。
②体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。
③身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える。
(イ) 内容
①子どもからの働きかけを踏まえた、応答的な触れ合いや言葉がけによって、欲求が満たされ、安定感をもって過ごす。
②体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受け止めてもらい、保育士等とのやり取りを楽しむ。
③生活や遊びの中で、自分の身近な人の存在に気づき、親しみの気持ちを表す。
④保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ。
⑤温かく、受容的な関わりを通じて、自分を肯定する気持ちが芽生える。

また表3に、1～2歳児の領域「人間関係」のねらいと内容を示す。

表3 保育所保育指針 1～2歳児の「人間関係」のねらいと内容

保育所保育指針第2章2(抜粋)
イ 人間関係
他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。
(ア) ねらい
①保育所での生活を楽しみ、身近な人と関わる心地よさを感じる。
②周囲の子ども等への興味や関心が高まり、関わりをもとうとする。
③保育所の生活の仕方に慣れ、きまりの大切さに気付く。
(イ) 内容
①保育士等や周囲の子ども等との安定した関係の中で、共に過ごす心地よさを感じる。
②保育士等の受容的・応答的な関わりの中で、欲求を適切に満たし、安定感をもって過ごす。
③身の回りに様々な人がいることに気づき、徐々に他の子どもと関わりをもって遊ぶ。
④保育士等の仲立ちにより、他の子どもとの関わり方を少しずつ身につける。
⑤保育所の生活の仕方に慣れ、きまりがあることや、その大切さに気付く。
⑥生活や遊びの中で、年長児や保育士等の真似をしたり、ごっこ遊びを楽しんだりする。

こうした乳幼児期の教育の基本理念の変更を踏まえ、幼稚園等において教育・保育を遂行するためには、誕生時から小学校就学期にわたる乳幼児の発達を正しく理解する必要がある(以下、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園を総称して幼児教育施設と表記する)。本稿では、誕生直後(新生児期)から就学期にかけての人間関係の発達の過程を発達心理学の知見を踏まえて概観し、幼児教育施設における教育・保育のためのガイドラインを検討することを目的としている。

2. 乳幼児期の遊びに見られる人間関係の発達

幼児教育の本質は、幼児の自発的な遊び活動を通して学習が行われるという考え方にある。したがって、領域「人間関係」のねらいを達成するためには、乳幼児の遊びの発達段階を理解しておく必要がある。

Parten(1932)は、保育所の幼児が室内でどのように遊んでいるかを観察し、人間関係のあり方という

観点から遊びを次の6種類に分類した。

①unoccupied behavior(専念していない行動／何もしていない状態)

これは、観察者が「遊び」とであると認識できないような行動群を含むカテゴリーである。ふらふらと歩き回る・棒きれなどをただ振り回しているといった、何かに集中している(専念している)とは見えない行動である。

②onlooker behavior(傍観者の行動)

これは他の子どもの遊びを眺めているだけで、自分では遊んでいない行動である。他の子どもに話しかけることはあるが、自分では遊びに没頭していない。①の行動と異なるのは、「他者の遊びを眺める」＝他者を意識しているという点である。

③solitary play(一人遊び)

他の子どもとは異なったおもちゃ等で遊んでいる状態である。他児とは直接的な関係がなく、自分の好きな遊びに没頭している状態を指す。例えば積み木で家造りに熱中していたり、園庭で虫探しに熱中している状態は一人遊びである。

④平行遊び(paralell play)

この活動は、他児のそばで同じようなおもちゃ等を用いて遊んでいる状態である。しかし、他児と遊びのテーマを共有して"一緒に"遊んでいるわけではない。例えば1人の幼児が砂場で山を作っているときに、別の幼児が砂場にやってきて、自分も山を作ったり砂で団子を作ったりすることがある。この状態は、2人の幼児が一緒に遊んでいるわけではなく、"平行して"遊んでいる状態である。

⑤連合遊び(associative play)

他児と一緒に(遊びのイメージを)共有しながら遊んでいる状態である。しかし子ども一人一人は、自分のやりたい活動に従事することが中心となる。たとえば戦隊ヒーロー物のごっこ遊びをしている際に、何人もの幼児がリーダー格である"〇〇レッド"を演じていることがある。実際のテレビ番組ではリーダーが1人であるにもかかわらず、複数の幼児が〇〇レッドを演じており、ごっこ遊びのメンバーはそのことに違和感を抱かないという場面が当てはまる。

⑥cooperative or supplementary play(共同あるいは組織化された相補的遊び)

この活動は、集団の中で共有された目標があり、目標を達成するために役割分担が見られる遊びであ

る。例えばお家ごっこの中で、お母さん役は1人しか演じることができないため、お姉さん役や赤ちゃん役を設定して役割分担する場合は、協同遊びの状態である。またサッカーごっこのように、まず2チームに分かれた後、フィールドプレイヤーとゴールキーパーに分かれ、キーパー役の子どもだけがボールに手で触れることができる、という役割分担はまさに協同遊びである。

Parten(1932)が報告したそれぞれの遊びの頻度を図1に示す。図1より、専念しない行動は3歳では見られなくなること、傍観者の行動は各年齢で少しずつ見られることがわかる。また、一人遊びは年齢と共に漸減すること、平行遊びが2歳から3歳にかけて減少するのと対照的に、連合遊び・協同遊びの頻度が増加していくことが示された。

日本の幼児教育においては、幼児の主体的な遊びは貴重な学習の機会だと捉えられている(文部科学省, 2017)。したがって1人遊びであっても、自分の好きな対象物に没頭したり探索したりする活動や、絵本を読む活動は重要な学習活動だと考えられる。

これに対して、平行遊びは他者に関心を有してはいるが、他者と一緒には遊んでいない状態である。したがって、自分の考えや心情を他者と伝え合うという観点からすれば、深い学びには至りにくい活動だと考えられる。こうした活動は3歳頃になると減少し、他者と遊びのイメージを共有する連合遊びや、役割分担の下に協力関係を構築する連合遊びが増加していく。したがって、連合遊びや協同遊びは深い学びという観点からも大切な活動だと考えられる。

中野(1988)は、1組の3歳児の遊びの様子を観察し、どちらか一方の幼児が他児の模倣をする状態が続くと、両者の会話や一緒に遊ぶ状態(連合遊び)が発生することを報告している。すなわち他者の模倣

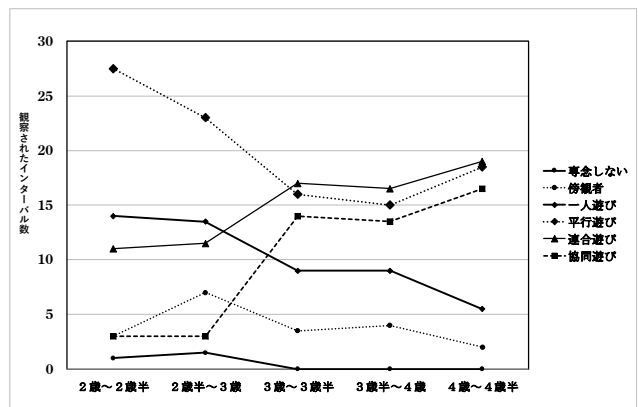


図1 遊びの発達の变化 (Parten(1932)より作成)

(平行遊び)は、他者および他者の活動に対して関心を有しているというメッセージになる。相手の幼児がそのメッセージに好意的に応答することで 2 人の遊びが始まると考えられる。したがって平行遊びは、それ自体としては遊びにおける学習的な意義が低いかも知れないが、その後の連合遊びや協同遊びにつながる重要な契機となっていることがわかる。

3. 乳幼児期の人間関係の発達と発達理論

前節では遊びに見られる乳幼児期の人間関係の発達を概観してきた。乳幼児の人間関係の発達過程を理解するためには、それを説明するための様々な発達理論を知る必要がある。発達に関する理論は一種類ではなく、様々な分野の様々な研究が報告されている。

本節では、なぜこのような発達の現象が見られるのかを明らかにするために、いくつかの発達理論を参照する。生物としてのヒトは仲間と協力することによって自然選択の中で進化してきたので、生まれた段階で既に他者と関わる行動パターンを有している。まず、ヒトが生得的に社会性を有していることを示す根拠を探る。次に、ごく初期の養育者との関係のあり方によって、その後の人間関係の発達の様相が変わってくるので、初期の愛着形成の問題を取り上げる。

さらに、遊びは子どもの認知発達の段階によっても変化する。そのため、一般的な認知発達の過程を正しく知り、認知発達と人間関係が遊びの中にどのように発現してくるかを紹介する。

さらに今日では、乳児や早期の幼児を対象とした様々な実験的研究や脳科学の研究の進歩により、自分の置かれた状況や他者との関係を把握する情報処理システムについての研究が盛んに報告されるようになった。そこで、社会的な認知に関する研究も展望しておく必要がある。

(1) 生得的な社会性の証拠

ヒトの乳児は、誕生直後からヒトの大人に対する様々な反応を示す。こうした反応は、ヒトが誕生直後からヒト(の大人)に対して選択的に関心を向けている証拠だと考えられる。つまり、ヒトは生得的に社会性を有した動物だと考えられるのである。

まず、他者の顔に対する反応について検討する。Melzoff & Moore(1977)は、生後 12 日と 21 日の新

生児が、大人の顔の変化(口を開ける、舌を出す等々)を模倣することができると報告した。Melzoff & Moore(1977)は、新生児が示す表情の模倣は、条件づけによる学習でもなければ、生得的な行動プログラムが開発されたわけでもない結論づけた。新生児はまだ随意運動のプログラミングが困難であるため、今日では”模倣”と呼ばずに共鳴反応と称することが一般的である。

山口(2003)は、顔の図と、目・口・鼻などのパーツがバラバラに配置された福笑いのような図版を新生児に提示した。その結果、新生児は顔の図を選択することが示された。新生児は「目鼻口が正しく位置している」図を選択的に注視するため、生得的にヒトの顔に対する興味を有していると考えられる。

次に音声に対する反応を検討する。Bower(1975)の観察によれば、母親が新生児に対して"How important you …"と話しかける際に、新生児の左手が上がり、人差し指が音節毎に動く様子が観察された。随意運動 Bower(1975)が獲得される以前に大人の音声に対して同期する動作現象を、Bower(1975)相互作用の同期性と呼んだ。相互作用の同期性は、新生児がヒトの音声に対する興味を有している証拠だと考えられる。

このように、新生児はヒトの顔・表情・音声に対する選好性を有していることが様々な研究から明らかになってきた。通常環境でヒトが誕生した場合、周囲には母親を中心とした家族と一緒に生活している。したがって、ヒト、特にヒトの大人に強い関心を向け、表情や音声の情報を取り込もうとする新生児の行動は、環境に対する適応度を高める機能がある。ヒトはこのように社会性を有して誕生すると考えられる。

なお、成人を対象とした脳機能の解析によれば、顔認知中枢(紡錘回)が存在することが明らかになってきた。脳磁図(MEG)を用いた研究では、目の存在、顔のパーツの変化などに対応して活性化する脳の部位があると考えられる(柿木・三木・本多・田中・中渡, 2010)。おそらく新生児にもこうした顔認知の中枢があり、ヒトの顔情報に選択的に反応していると考えられる。こうした顔認知システムがどのように発達していくのかについて、今後の研究が待たれるところである。

(2) 愛着の形成と内的作業モデルの構築

Bowlby(1969)は、特定の大人(養育者)との心理

的な結びつきを形成することを愛着(attachment)と呼んだ。乳児の側からすれば、特定の大人に対して接近したり探したり(定位)する行動が愛着行動である。これは安心感を求めるための行為であり、十分に安心感が得られた子どもは結果的に探索活動が活発になる。

また Bowlby(1973)は、愛着の形成と子どもの精神状態について"作業モデル"という用語を用いて説明している。作業モデルとは、人間が物事を考える際の大前提となる条件のことである。愛着の対象人物と自分自身について子どもが構築する作業モデルについて、Bowlby(1973)は次のように述べている。

ある人物が構築する世界の作業モデルにおいて重要な点は、その人の愛着人物たちがだれであり、その人物たちがどこにいるか、その人物たちにどのような反応を期待できるか、についてのその人の考えである。同様に、ある人が自己について構築する作業モデルにおいて、重要な点は、自分自身が自分の愛着人物たちの目にどのように受容されているか、あるいは受容されていないか、についてのその人の考えである。

Bowlby(1973)が提唱した内的作業モデルの考え方は、子どもの自己概念や、子どもが自身が生活している環境とそこに含まれる他者に対する認知的評価の枠組みが、成長していく過程で持続的な影響を及ぼすものとして受け止められた。すなわち、人生の初期段階で構築された作業モデルによって、その後のパーソナリティ形成や他者との関係性のあり方が規定されるという考え方である。ただし初期経験を重視する考え方は、子どもの発達の可塑性を過小評価してしまうという問題をはらんでいる。この点については後に触れる。

ライフサイクルという観点から、Erikson(1989)も同様の提言を行っている。Erikson(1989)は人間のライフサイクル(発達段階)を8段階に分け、それぞれの段階で体験すべき内容と、それが十分に体験されなかった場合(危機)という発達のパターンを提唱した。乳児期に当たる第1段階は基本的信頼(basic trust)を形成する時期であり、これに対する危機は基本的不信(basic mistrust)と呼ばれる。Erikson(1989)は、第1段階で基本的信頼を十分に経験し、"希望"を抱くことが発達課題だと考えている。

安定した愛着が形成されることで、自己と他者に

関する肯定的な内的ワーキングモデルが形成されるとすれば、その後の人間関係にもよい影響を及ぼすことが想定できる。Kochanska, Aksan, Knaack, & Rhines(2004)は、生後14ヶ月時点で母子間の愛着を測定し、その後3年弱にわたる追跡調査を行った。子どもの愛着スタイル(回避型・安定型・抵抗型)と親の養育態度との間に関連はなかった。しかし親の養育態度と56ヶ月時点での子どもの道徳性の相関を求めたところ、安定型の幼児にのみ、親の応答的な関わり・優しいしつけと子どもの道徳性の間に中程度の正の相関($.54 \leq r \leq .62$)が得られた。Kochanska et al. (2004)は、安定型の愛着スタイルが、親の養育態度と子どもの道徳性の媒介メカニズムになっていると述べている。おそらく安定型の子どもは、自己と他者に対する肯定的な内的ワーキングモデルが形成されており、自律的かつ他者にも優しい道徳的判断ができたものと推察される。

ただし、不適切な養育(maltreatment)によって他者への不信感を形成してしまった幼児であっても、その後の仲間関係によっては問題が軽減されることがわかっている。一般的には、子ども自身が暴力を受けたりDVを目撃したりして育った子どもは、内在化問題行動(不安・怖がり等)や外在化問題行動(攻撃・逸脱)を示しやすい。しかし Criss, Pettit, Bages, Dodge, & Lapp(2002)は、リスクの高い家庭(貧困・DVの存在・厳しいしつけ等)で育った子どもが、必ずしも外在化問題行動を示さないことを報告している。具体的には、幼稚園において仲のよい友達ができたり、多くの仲間から受容されたりした子どもは、小学校への就学後に外在化問題行動を示しにくいことが明らかになった。つまり、幼児期に仲間との良好な関係を十分に経験することで、自己・他者に関する否定的な内的ワーキングモデルが変容する可能性が示されたのである。これは初期経験が絶対的な影響を有するものではなく、幼児教育の持つ効果を実証した研究であるといえる。

(3) 一般的な認知発達(発生的認識論)

Piaget(1970)によれば、ある行為のスキーマに様々な物を適用させて調節の活動が主になると、それは exercise game(練習遊び)と呼ばれる。中垣(2007)の解説によれば、たとえば「箸でつまむ」という行為のスキーマ(シエム)を子どもが有しており、食べ物以外の物(例えば消しゴムやクリップなど)に対して繰り返しつまむ行為を適用し、やがてこれらも物を箸

でつまめるようになったとすれば、本来箸でつまむ対象でなかった事物を「箸でつまむ」というシエマの中に取り入れる同化作用である。したがって発達の初期段階で同化の作用が調節作用よりも強く表れたときには(感覚運動的な)遊びが生じると考えられる。

やがて幼児は、感覚運動的な認識のシエマを変更する段階に至る。それまで自分が有していた行為のシエマを、外界の事物に合わせて変更していく作用が調節である。表象機能(または象徴機能)が獲得され、ある事物を別の様相(図的イメージ:GDA, ふり行為, 言語)によって表すことができるようになると、振り遊び(fiction game)が生まれ、やがて構成的遊び(constructive game)が発生する。例えば自分が母親ではないにもかかわらず、母親のように振る舞う"お母さんごっこ"や、空き箱を自動車に見立てて走らせる見立て遊びは、表象機能の獲得なしには成立しない遊びである。

具体的に述べるならば、"母親とはこのような発言をする"・"母親とはこのような動作をする"という表象が幼児の心の中に存在していなければ、お母さんごっこという遊びは発生しない。また、"自動車とは(概ね)四角い形をしていて、ブーブーと音を立てて前に進む物体である"という表象がなければ、箱を自動車に見立てることはできない。このように表象機能の獲得期には、表象を活用した様々な遊びが誕生する。その際に、演じる要素が強く見られる遊びをdramatic play(劇的遊び)と呼び、物を見立てたり構成したりする要素が強く見られる遊びをconstructive play(構成的遊び)と呼ぶ。また感覚運動的な練習遊びは、表象が介在せず身体機能のみを使用する活動であることから、機能的遊び(functional play)とも呼ばれている。

認識の発生を踏まえると、他者との関係性とは別にまず感覚運動的(機能的)遊びが発生する。そして表象機能の獲得に伴って、劇的遊びや構成的遊びが見られるようになる。さらに記憶力・言語能力の発達に伴って概念的思考ができるようになると、言語化された行動パターン(ルール)を心に留めながら、常にそのルールを参照して遊ぶ"ルールのあるゲーム"が遊びの中心的な活動になっていくと考えられる。

Parten(1932)の遊びの分類に発生的認識論の考え方を組み込んだのが Rubin(1986)である。

Rubin(1986)が作成した遊び発達尺度は、幼児の行動をParten(1932)の分類とPiaget(1970)の発生的認識論を組み合わせる評価システムである。

Rubin(1986)の尺度では、一人遊び、平行遊び、連合遊びと協同遊びをまとめた集団遊び(group play)という3つの大きな遊びのカテゴリーの中に、それぞれ感覚運動的な遊び(機能的遊び: functional play)、構成的遊び(constructive play)、劇的遊び(dramatic play)、ルールを伴うゲーム(game with rules)が内包されている。

また、玩具・遊具などを使って遊んではいないが、仲間同士でおしゃべりを楽しむ活動も幼児期には頻繁に見られるため、会話(conversation)というカテゴリーを設けた。さらに、Parten(1932)は観察の対象を室内遊びに限っていたが、幼児教育施設では園庭を走り回ったり、ブランコや滑り台を使って運動遊びをしたりすることが多く見られるため、これらを運動遊び(large play)と表して、目的性の薄い機能的遊びとは異なる遊びとして分類した。Parten(1986)の遊び観察尺度を小林(1996)が整理し直したカテゴリーを表3に示す。

表3 遊び観察尺度

何もしていない行動(unoccupied behavior)
傍観者の行動(onlooker behavior)
一人遊び(solitary play)
機能的遊び(functional play)
構成的遊び(constructive play)
劇的遊び(dramatic play)
ルールを伴うゲーム(game with rules)
運動遊び(large play)
読書(reading)
平行遊び(parallel play)
機能的遊び(functional play)
構成的遊び(constructive play)
劇的遊び(dramatic play)
ルールを伴うゲーム(game with rules)
運動遊び(large play)
読書(reading)
集団遊び: 連合遊びと協同遊びを含む(group play)
機能的遊び(functional play)
構成的遊び(constructive play)
劇的遊び(dramatic play)
ルールを伴うゲーム(game with rules)
運動遊び(large play)
読書(reading)
会話(conversation)
作業など(others)

小林(1996)より引用

Parten(1932)は単に幼児の遊び行動を観察し、年齢別に分類しただけであったが、Rubin(1986)は認知(表象的思考)の発達過程を取り入れることで、なぜそのような遊びが発達してくるのかを解明する取り組みを行った。Piaget(1970)は知的能力を「論理数学的思考」と捉えていたが、その後の脳科学の発展により、脳は様々な部位で異なった情報処理を担当しており、それらが並列的に連動しながら意識・思考が生まれてくることが明らかになった(Gazzaniga, 2011)。いわゆる脳の機能局在論である。(1)の最後に触れたように、他者を認知するメカニズムが脳内に存在することが指摘されている。そこで、遊びに見られる人間関係の発達を理解するためには、一般的な認知発達だけではなく、社会的な情報処理能力の発達についても知る必要がある。

(4) 社会的情報処理能力の発達

社会的情報処理能力の発達に関して中核となる概念は、「心の理論」である。心の理論とは、もとは霊長類がヒト(あるいは他者)の心を推測するメカニズムを有しているか、という議論から始まった。後に多くの研究が行われ、一般的には誤信念(誤った信念)課題に正答することが心の理論の獲得の証拠だとされてきた。

日本においては子安・服部(1999)が、生活年齢及び発達年齢を基準とした誤信念課題の正答率を報告している。2種類の物語を用いて誤信念課題を実施したところ、生活年齢・発達年齢のいずれの場合でも5歳台で正答率が40~65%、6歳台で60~95%程度であった。この結果から、日本の幼児では5歳から6歳にかけて誤信念課題を理解できるようになると考えられる。

それでは、誤信念課題に正答できるまでの発達の過程はどのような段階をたどるのであろうか。Wellman & Liu(2004)は、心の理論に関する研究45件をメタ分析し、自らも幼児に対する様々な課題を実施した結果、心の理論の発達段階を提唱した。すなわち、①幼児は自分と他者がそれぞれ異なった願望を有することを理解する、②幼児は自他が異なった信念を有することを理解する、③他者が抱く誤信念を理解する、④本音と建て前の感情の違いを理解する、という段階である。

しかし近年では、かなり早い段階から子どもは他者の心的状態に気付いているという実験的な証拠が得られている。その根拠が共同注視と三項関係の成

立である。幼児期の早期に子どもが他者との間で情報を共有することを三項関係の成立と呼ぶ。二項関係とは、子どもが他者に関心を向けることであるが、三項関係とは他者が何に関心を向けているかを理解し、自分もその対象に関心を向け、さらに他者に自分がその対象物に関心を向けていることを表現する状態のことである。他者の関心の対象を理解し、自分もその対象に関心を向けると言うことは、具体的には他者が指さした先にある対象物を見ること(指さしの理解)と、他者の視線を追ってその先にある対象物を見ること(他者の視線への追従)である(児山・樋口・三島, 2015)。

他者が関心を向けた対象を見た後で、自分が他者を見つめるという視線の移動を繰り返すことを交互注視と呼ぶ。児山ら(2015)によれば観察対象となった乳児(A児)は、7ヶ月の時点では大人がA児の関心の対象に注意を向けて遊ぶ場面では、大人に対して一瞬視線を送る行動が見られた。9ヶ月頃には自発的な交互注視が見られるようになり、10ヶ月の時点では頻繁に交互注視を行っていたという。したがって、少なくとも生後1年までの間に、共同注視が行われ、三項関係が成立すると考えられる。これは、生活の世話をしてもらうための要求表現ではなく、他者と関わることを快と感じて関わりを楽しもうという行動であろう。

また、誤信念課題を低年齢児用に改変した実験課題を用いたところ、1歳半の幼児が他者の誤信念を予測するという結果が得られた(千住, 2012)。したがって、典型的な誤信念課題に正答できる前に、他者の視線や意図、信念を理解する過程が存在することが明らかになった。

人間が他者の存在を理解するためには、他者の行動を観察して、その内的状態を推測しなければならない。したがって、もし自分が同じ行動をしたらどのような心情であるか、という自分の内的状態を参照して他者の内的状態を判断していると考えられる。他者の動きを観察すると自分も同じ動きをしているように感じる神経細胞がミラーニューロンである。チンパンジーによる実験では脳のどの部分の神経細胞が発火するかが特定されているため、これをミラーニューロンと呼んでいる(Iacoboni, 2008)。しかしヒトの場合には、各種の脳画像的解析を用いてどの部位が活性化しているかを調べるため、ミラーシステムと呼ぶことも多い。佐藤(2011)

は、他者の身体の動きを内的に模倣することで観察者の中に同様な状態が再現されると述べている。

他者の動きを自分の心的状態の中に再現し、自分だったら何を考えたり感じたりするかを把握した上で、それを他者に投影するという考え方をシミュレーション説という(福島, 2011)。このシミュレーション説に従えば、2～3歳児が他者の動きを実際に模倣することで、両者が互いに自分の心情と相手の心情を同調させることができると考えられる。先に紹介したように、他者を模倣することが契機となって連合遊びに発展すると考えられる(中野, 1988)。つまり、お互いが身体的・心理的に同じイメージを共有するために、相互の模倣は大切な役割を担っていると考えられる。

ただし福島(2011)は、ミラーニューロン以外の神経回路によるシミュレーションが存在することや、シミュレーションでは説明できない他者理解のシステムが存在することを指摘している。この分野については、今後の研究の発展が待たれる。

4. 考察—人間関係の発達と幼児教育—

(1) 遊びの発達段階

前節で、人間関係の発達に関連性の深い発達理論を4つに分けて紹介してきた。これらを整理したものが表5である。表5の上段には、それぞれの年齢段階でどのような遊びが見られるかをという現象を整理してある。その下に4種類の発達理論がどの段

階でどのように発現するのか、概略を記載した。これが誕生から幼児期の終わりまでの人間関係を理解するための手がかりとなるであろう。

紙面の都合で紹介できなかった部分もあるが、ヒトは誕生直後から既に他者に対する関心を示す。特に顔や音声に対して選択的に反応することが知られている。さらに身体接触やあやし行動を伴う安心感・被受容感を高めることで、特定の養育者に対する愛着を形成する。十分な安心感が保証されることで、周囲への興味・関心に基づく探索活動が活性化される。したがって、初期の温かい大人との関係性の構築が、その後の人間関係の出発点であるといえる。

1歳台は子どもが大きく発達する時期である。感覚運動的な思考から表象的思考に移行する時期であると共に、他者の心的状態に関心を向けて他者を理解し始める時期でもある。そして2歳台になると、安定した愛着・認知発達・社会的情報処理の発達が重なって、他者との遊びが活発になってくる。

2歳から4歳にかけては、他者と遊びのイメージ(表象)を共有し、相手の立場をある程度理解することに伴って、連合遊びが活発になってくる。しかし他者を十分に理解できているわけではないため、遊びの中で様々な対立が生じる時期でもある。

5～6歳になると、自分と他者の心的状態の違いをかなり明確に理解できるようになる。そのため、遊びを展開する際に相手を説得したり、相手の立場に配慮しながら遊びのテーマやルールを提案し、協力して遊ぶことが増加してくる。

表4 遊びの発達と発達理論との関連性

発達段階		新生児期	乳児期	1歳前半	1歳後半～2歳	2～3歳	4歳台	5～6歳
現象	遊びに見られる人間関係の発達	(原始反射)	1人遊び (自己・周囲の探索遊び)		1人遊び (振り遊び) (見立て遊び)	平行遊び 連合遊び (劇的・構成的遊び)		協同遊び (劇的・構成的遊び) (ルールのあるゲーム)
発達理論	社会的情報処理の発達	生得的な社会性が、社会的情報処理の源泉か？		共同注視 三項関係	自他の願望・信念の区別		心の理論の獲得 (誤信念課題への正答)	
	認知発達	感覚運動的知能 (機能的遊び)				表象の芽生え	表象(イメージ)の共有	ルール参照
	愛着の形成	自己肯定感 他者への信頼感		安心感に基づく 探索行動	保育者への信頼感 仲間への信頼感			
	生得的な社会性	他者への関心 (共鳴反応)		同年代の仲間への興味				

(2) 乳幼児期の保育・教育に対する提言

以上の発達の経過を踏まえ、幼児教育施設で子どもの保育・教育を行うために必要な保育者の関わりを提言する。

まず、保育者との信頼関係の構築(幼児教育施設における愛着の安定化)が何よりも必要である。この点が乳児の保育の「視点イ」のねらいと内容に集約されている。視点イに記載されている内容は、まさに初期段階における人との関係性の発達課題を精選したものであり、保育者には子どもが安心できる環境を構成し、受容的に関わるのが何よりも求められている。

次に1~2歳児の保育においては、子どもが様々な事物を探索し表象(イメージ)を形成するために、安全で探索できる環境を用意する必要がある。様々な玩具、年齢に相応しい絵本など、まず子ども自身がしっかりと一人遊びができる環境と、子どものイメージを引き出すような保育者の言葉かけが大切な時期である。この時期から、他者の心的状態の理解が徐々に芽生えてくるが、遊びの中で他者と協力することはまだ難しい。

2歳~3歳台になると、他児との関わりが活発になってくる。おもちゃや場所を巡るいざこざも盛んに発生する(木下・朝生・斉藤, 1986)。しかし、自分と他者が異なる願望(欲求)を持った存在であることを実感するためには、他者とのいざこざを完全に回避してしまっただけではいけない。他者との葛藤を経験することが、自他の違いを認識するために貴重な体験となっているからである。

4歳頃からは、他者の心的状態を徐々に理解できるようになる。しかし現象としては、まだ自分の意思・願望を中心とした遊びが多い。〇〇ごっこの中で同じ役を演じる子どもが複数名存在するように、他者と協力することはまだ困難である。しかし、保育者が強制的に子ども同士を協力させるのではなく、子どものイメージをうまくつなげて、緩やかに協力し合う場を設定することが大切である。小林(1999)が紹介する3歳児クラスの例では、担任保育者がいくつかのグループの子どもたちのイメージをつなぐ(連合する)ような言葉かけを行うことで、多くの子どもが連合遊びに参加することができた。保育者は、子どもの主体性を生かしながら、連合できるような場の設定・言葉かけの技能を高めることが大切である。

5~6歳台になると、子どもたちは言語化されたルールを心に留めながら遊ぶことができるようになる。また、他者の心的状態をかなり正しく理解できるようになる。したがってこの時期には、ルールのあるゲーム遊びを十分に体験することと、話し合いながら共通の目的を達成できるような協同遊びを育てることが大切である。

小林(2013)は、年長児クラスでルールのあるゲームを継続的に導入し、社会的スキルが育った事例を報告している。また小林・岩田・岩田・米崎(2017)は、生活発表会の劇を自分たちで作る過程で話し合いの活動を十分に取り入れた結果、他者の意見を受け入れたり協力したりしながら、自分たちも満足できる劇を作り上げた保育の事例を紹介している。

このように、保育者は発達理論を正しく理解した上でそれぞれの段階の子どもの特徴を把握する必要がある。そして、発達段階の特徴に相応しい保育環境を構成し、人間関係の発達を支援できる保育技術の習得が必要である。

引用文献

- バウワー, T. G. R. 1982 鯨岡俊(訳)ヒューマン・ディベロプメントー人間であること・人間になることー ミネルヴァ書房. (Bower, T. G. R. 1975 *Human Development* San Francisco : W. H. Freeman and Company)
- ボウルビィ, J. 1991 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)母子関係の理論(新版)Ⅰ愛着行動 岩崎学術出版社. (Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss Vol 1 : Attachment Behavior*. Tavistock : Tavistock Institute of Human Relations.)
- ボウルビィ, J. 1991 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)母子関係の理論(新版)Ⅱ分離不安 岩崎学術出版社. (Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss Vol 2 : Separation and Anger*. Tavistock : Tavistock Institute of Human Relations.)
- Criss, M. M., Pettit, G. S., Bates, J. E., Dodge, K. A., & Lapp, A. L. 2002 Family Adversity, Positive Peer Relationships, and Children's Externalizing Behavior : A Longitudinal Perspective on Risk and Resilience. *Child Development*, 73, 1220-1237.
- エリクソン, E. H. 1989 村瀬孝雄・近藤邦夫(訳)ラ

- イフサイクル, その完結 みすず書房.
- (Erikson, E. H. 1982 *The Life Cycle Completed* New York : W. W. Norton and Company)
- 福島宏基 2011 ミラーとメンタライジング子安増生・大平英樹(編著) ミラーニューロンとく心の理論>新曜社, Pp. 153-193.
- ガザニガ, M. S. 2014 藤井留美(訳)<わたし>はどこにあるのかーガザニガ脳科学講義ー紀伊國屋書店 (Gazzaniga, M. S. 2011 *Who's in Charge? : Free Will and the Science of the Brain*. New York : Blackman Inc.)
- イアコボニー, M. 2009 塩原通緒(訳) 「ミラーニューロンの発見ー「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学ー, 早川書房. (Iacoboni, M. 2008 *Mirroring People : The New Science of How We Connect with Others*. New York : Brockman Inc.)
- 柿木隆介・三木研作・本多結城子・田中絵美・中渡江美 2010 脳波と脳磁図を用いた顔認知の研究 岩田誠・河村満(編) ノンバーバルコミュニケーションと脳ー自己と他者をつなぐものー医学書院, Pp. 23-35.
- 小林真 1996 幼児の社会的認知・非言語主張性と遊び, 上田女子短期大学紀要, **19**, 63-73.
- 小林真 1999 個を生かす集団づくりー仲間関係の発達とその援助ー富山大学教育学部幼児教育研究会・富山大学教育学部附属幼稚園(編著) 幼児の思いに答える環境づくりーこんなところで遊びたいー明治図書, Pp. 63-78.
- 小林真 2013 保育園のクラスを対象とした社会的スキルの発達支援臨床発達心理実践研究, **8**, 8-16.
- 小林真・岩田夏実・岩田郁代・米崎瑛美 2017 保育内容(人間関係)の観点から見た劇遊びの意義ー附属幼稚園におけるこどもまつりの教育的効果の検討ー教育実践研究, **12**, 171-179.
- Kochanska, G., Aksan, N., Knaach, A., & Rhines, M. 2004 Maternal Parenting and Children's Conscience : Early Security as Moderator. *Child Development*, **75**, 1229-1242.
- 厚生労働省 2017 保育所保育指針
- 児山隆史・樋口和彦・三島修治 2015 乳児の共同注意関連行動の発達ー二項関係から三項関係への移行プロセスに注目してー島根大学教育臨床総合研究, **14**, 99-109.
- 子安増生・服部敬子 1999 幼児の交互交代と「心の理論」の発達京都大学大学院教育学研究科紀要, **45**, 1-16.
- Meltzoff, A. N. & Moore, M. K. 1977 Imitation of Facial and Manual Gestures by Human Neonates *Science*, **178**, 75-78.
- 文部科学省 2017 幼稚園教育要領
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 2017 幼保連携型認定こども園教育・保育要領
- 中野茂 1988 初対面の3歳児のやりとりの開始過程の検討. 藤女子大学・藤女子短期大学紀要, **26**(Ⅱ), 9-18.
- Parten, M. B. 1932 Social Participation among Pre-school Children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **27**, 243-269.
- ピアジェ, J. 2007 中垣啓(訳)ピアジェに学ぶ認知発達の科学北大路書房 (Piaget, J. 1970 *Piaget's Theory*. In Mussen, P. H. (ed.) Carmichael's Manual of Child Psychology (3rd ed.:Vol. 1) New York:John Wiley & Sons.)
- Rubin, K. H. 1986 Play, Peer Interaction, and Social Development. In Gottfried, A. W. & Brown, C. C. (eds.) *Play Interactions : The Contribution of Play Materials and Parental Involvement to Children's Development*. Lexington : Lexington Books, Pp. 163-174.
- 佐藤徳 2011 私のような他者／私とは異なる他者子安増生・大平英樹(編著) ミラーニューロンとく心の理論>新曜社, Pp. 59-102.
- 千住淳 2012 社会脳の発達. 東京大学出版会
- Wellman, H. M. & Liu, D. 2004 Scaling of Theory-of-mind Tasks. *Child Development*, **75**, 523-541.

(2020年5月19日受付)

(2020年7月15日受理)